

Title	ゲーテとスピノザ主義
Author(s)	大槻, 裕子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58085
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【30】

氏名	大 槻 裕 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 24256 号
学位授与年月日	平成22年11月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	ゲーテとスピノザ主義
論文審査委員	(主査) 教授 三谷 研爾 (副査) 教授 入江 幸男 准教授 吉田耕太郎 言語文化研究科准教授 津田 保夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ゲーテにおけるスピノザ受容に着目し、その背景となった18世紀後半のドイツの思想的状況と彼の文学的発展との連関のうちに『色彩論』に代表されるゲーテの自然科学的著作を位置づけた、包括的な研究である。全体は9章から構成され、目次・本文・注・文献表・索引を合わせて全343ページに及ぶ。

序章では、青年ゲーテが傾倒したスピノザ主義が、彼の長い生涯を貫く重要な宗教的・思想的モメントとなり、またその独自の自然研究を導いたという本論文の基本的視座が提示される。

第1章は、急進的敬虔主義に共感していたゲーテが、人間的意志の自由を認めるペラギウス主義的信条ゆえに、敬虔主義教団から斥けられた結果、アルノルトの『党派にかたよらない教会史と異端史』に向かった道程を明らかにする。この遍歴は、とりわけ1770年代前半に書かれた宗教論的

著作に即して確認され、アルノルトの教会批判のうちにスピノザ主義を読み取ったゲーテが、独自の汎神論的立場を構築していったことが指摘される。

第2章は、1770年代前半、ヘルダーとの邂逅によりシュトゥルム・ウント・ドラング期の人間観・芸術観に達したゲーテの思想的発展と、1780年代に知識人世界を席卷したスピノザ論争との関係を検証し、さらにこの時期のゲーテの積極的なスピノザ受容の様相を明らかにする。ゲーテが解釈した神即自然の立場が、自然の無目的性や法則性への洞察を介して、自然研究へとつながっていく理路もまた確認される。こうした自然理解は、第3章では、シラーの思想的立場と対比して考察され、「分極性」と「高昇」に貫かれた自然の世界を直観する形而上学的思考として位置づけられる。

第4章は、シュトゥルム・ウント・ドラング期から古典期へという文学的発展に並行して、青年ゲーテの自然耽溺が自然認識へと深化していった過程を確認したうえ、1780年代以降の自然研究の要となる原型論とスピノザ思想との関連を検討する。スピノザ的な神即自然から独自の汎神論へと展開したゲーテの自然理解が、原型論を介して、有機体たる全的自然の形態変化の内的法則認識という次元に到達したことが確認される。

第5章では、ゲーテが歴史の世界をもこうした視座から把握し、歴史のなかで形成される個人の性格の内的理解を重視したことが、ランケの歴史主義との関連から検討される。彼が歴史のうちに見た循環の論理が、『ファウスト第二部』において、生と死の循環として文学的に形象化されている様相を明らかにするのが第6章である。

第7章では『色彩論』を取り上げ、光と闇の分極性のあいだに生じる色彩現象を、経験として内在的かつ総合的に記述していくゲーテ的自然研究の特質が検証される。終章では、分析よりも総合を重視して自然研究に取り組んだゲーテの立場が、スピノザ的な自然理解に発すること、またニュートン的な近代科学の相対化という思想史的意義を有することが、あらためて確認される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、スピノザ受容を通じて汎神論的自然認識を確立するにいたった青年ゲーテの思想形成を、同時代のドイツの精神的文脈に即して解明するとともに、そうして得られた自然認識が彼の歴史認識をも規定していること、さらには『色彩論』を頂点とする自然科学的著作を貫いていることを明らかにしている。

よく知られたエピソードでありながら、国内外ともに先行研究の乏しいゲーテのスピノザ受容は、資料的制約ゆえに、時期およびその内容の確定にかなりの困難をとまう。本論文は、M.ボラッハーの研究を参照しながら、文学作品のみならず、宗教的著作、自然科学的著作、さらには書簡等を広く渉猟して、ゲーテによるスピノザ思想の敷衍や拡張の様相を丹念に掘り起こしている。その結果、ゲーテ的な意味でのスピノザ主義の広がりとその射程を大きく捉えることに成功している。とりわけ、敬虔主義(ピエティスム)への共感と離反のなかでスピノザに傾倒していった青年ゲー

テが、レッシングやメンデルスゾーン、ヤコービやヘルダーといった知識人たちを巻き込んだスピノザ論争（汎神論論争）の知的緊張のなかで、独自の思想的立場を獲得していった過程の考察は、厚みとダイナミズムをともに具えた充実した記述として、高く評価される。

しかしその反面、このようなアプローチ方法がスピノザ主義という概念の内容じたいを曖昧なものにしてしまう傾向も否めず、新プラトン主義や流出説との意味的差異が明確化されていない。また、ゲーテにおけるスピノザ主義と他の思想家におけるスピノザ受容との相違、さらにはマイネッケのいう歴史主義との関連も、検証が十分とはいえない。こうした問題については、ゲーテのテキストに密着した、さらにマイクロな分析と論証が必要であるとともに、英語圏を中心に進展している近年の実証的なドイツ啓蒙思想研究も参照されてしかるべきである。

とはいえこれらの点は、ゲーテにおけるスピノザ受容がはらんでいる問題の多層性、ならびに同時代のコンテクストとの関連性を、自然認識という観点から統一的にとらえた本論文の価値を減じるものではない。本論文の成果は、今後のドイツ 18 世紀思想史研究が踏まえるべき重要な知見である。よって本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。